

行政・司法各部門の支部図書館と専門図書館の連絡情報誌

びぶろす—Biblos

95号（令和4年12月）

特集：調べ方を調べる

リサーチ・ナビ

国立国会図書館

調べものに役立つ情報をまとめています

リサーチ・ナビについて

ヘルプ

サイトマップ

English

Google 提供

検索

主題から調べる

資料の種類から調べる

テーマ別データベース

「探す」ギャラリー

リサーチ・ナビ内の統合検索ができます。

検索

検索例：マンガについて | 宇宙 | 科学 | 路線価

ピックアップ

主題から調べる

賃金・労働時間に関する統計

主題から調べる

産業情報ガイド

主題から調べる

新型コロナウイルス

主題から調べる

スポーツについて調べる

資料の種類から調べる

JIS規格

資料の種類から調べる

大沼枕山・鶴林関係資料

国立国会図書館の調査研究資料

- 国立国会図書館の報告書・刊行物
- 参考書誌研究
- アジア情報室通報

国立国会図書館のサービス

- 資料・情報の利用
- 複写サービス

NDL ONLINE
国立国会図書館オンライン



表紙画像：

（上）国立国会図書館 オンライン調べ案内「リサーチ・ナビ」トップページ

(<https://rnavi.ndl.go.jp/jp/material.html>)

（左下）大阪大学附属外国学図書館 パスファインダー「るくぱす」が置かれた棚

（右下）令和 4 年度国立国会図書館支部図書館職員特別研修「図書館資料の保存（簡易補修）」の様子

95号（令和4年12月） 目次

『びぶろす』95号刊行にあたって	2
------------------	---

+++++【特集：調べ方を調べる】+++++

調べ方を拓いて示すパスファインダー	
国立国会図書館総務部支部図書館・協力課 吉間 仁子	3
「リサーチ・ナビ」のリニューアル ―さらに調べ方を調べやすく―	
国立国会図書館利用者サービス部サービス企画課 宇野 亮一	8
大阪大学附属外国学図書館のパスファインダー「るくばす」	
大阪大学大学院 言語文化研究科 博士後期課程 中村 瑞樹	16

+++++

「図書館資料の保存（簡易補修）」に参加して	
支部内閣法制局図書館 隅田 知子	21
国立国会図書館国会レファレンス課及び国会分館の見学に参加して	
支部国土交通省図書館 国土技術政策総合研究所分館 課長補佐 樋口 貴也	25

【訂正】

びぶろす 93号（令和4年4月）に、以下のとおり誤表記がございましたので訂正します。

・訂正箇所：p.9, 14行目 （誤）内務省地理院 → （正）内務省地理局

『びぶろす』95号刊行にあたって

『びぶろす』95号の特集「調べ方を調べる」では、図書館が提供するパスファインダー（テーマに沿った調べ方案内）に関する話題をご紹介します。

調査の手始めにインターネットを検索することは当たり前になりましたが、皆様はどのようなサイトをご覧になっているのでしょうか。

国立国会図書館が令和2年度に行った「図書館利用者の情報行動の傾向及び図書館に関する意識調査」(https://current.ndl.go.jp/FY2020_research)によると、「Q16 仕事に関する情報を得るための手段（情報源）としてインターネットを利用する場合、以下のサイトのうちどれをよく利用しますか。」（複数回答可）という質問に対し、「検索エンジン」と答えた人が最も多く、（3379人中3284人（82.5%））、次いで「ニュースサイト」（同1844人（46.3%））、「ウィキペディア」（同1646人（41.4%））、と続きます。一方で、仕事に関する情報源として有効と思われる「企業や政府自治体のHP」（同888人（22.3%））や「データベースや電子ジャーナル」（同263人（6.6%））は利用の低さが目立ちます。

しかし、こと仕事に関し、インターネット検索で検索結果の上位に表示されるリンク先で得られる情報だけでは、不十分なことも多いのではないのでしょうか。例えば、調査に有効な統計や調査レポート、データベースのデータ、参考図書などは、必ずしも検索結果として表示されるわけではありません。

限られた時間で、なるべく正確な情報を網羅的に探すために、それぞれの分野や対象資料に適した「調べ方」の重要性は、インターネットで検索することが当たり前になっているからこそ増していると考えられます。このため、多くの大学図書館や公共図書館、専門図書館などでは、パスファインダーを作成・公開し、インターネット上に限らず、テーマごとの情報源と調べ方を紹介しています。

今号では、実際にパスファインダーをどう作成・提供・活用しているかについてご寄稿いただきました。読者の皆様の「調べ方」を見直すきっかけになれば幸いです。

また、今年度は、3年ぶりに集合形態での支部図書館職員特別研修を開催しました。二つの研修について、それぞれの受講者に参加報告をお書きいただきました。研修での新鮮な気持ちを誌上で追体験してみてください。

（編集担当）

【調べ方を調べる】

調べ方を拓いて示すパスファインダー

国立国会図書館総務部支部図書館・協力課 吉間 仁子

『びぶろす』95号の特集「調べ方を調べる」では、パスファインダーを取り上げる。本稿では、「パスファインダー」という用語になじみのない方のために、パスファインダーとは何かを概説し、特集を読んでいただく一助としたい。なお、本稿の意見・分析にあたる部分は筆者の個人的見解である。

1 パスファインダー (pathfinder) とは何か

「パスファインダー」(pathfinder)を英和辞典で引いてみると、「開拓者」や「探索者」あるいは「草分け、パイオニア」といった訳や、軍事用語の「先導機」が示される。しかし、本特集におけるパスファインダーはこうした意味とは異なり、「利用者に対して、特定の主題に関する各種情報資源や探索方法を紹介・提供する初歩的なツール」であり、「調べ方に関する解説もなされているため、単なるリストやリンク集とは異なる」(『図書館情報学辞典 第5版』¹⁾もの及びこれに類するもののことを指す。この意味におけるパスファインダーは、1969年にマサチューセッツ工科大学で始まったが²、名称が決定的なものとして普及したとはいえないようで、英語圏でも research guide や、subject guide など⁴、様々な呼び方をされ、日本語でも「調べ方案内」「調べ方ガイド」など、様々な名称が見られる。主に、当該図書館の利用



写真 1 国立国会図書館東京本館
人文総合情報室で配布されている
パスファインダー。A4用紙両面印刷を三つ折りにしている

*本稿におけるウェブサイトの最終確認日はすべて2022年11月9日である。

¹『図書館情報学用語辞典』第5版 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 編. 丸善出版, 2020.8. p.200.[国立国会図書館請求記号: UL2-M7]

² Canfield, M.P., "Library pathfinders", Drexel Library Quarterly, 8(3), 1972. p.287-300. [国立国会図書館請求記号: Z55-B22]

³ Hemmig, W. "Online pathfinders: Toward an experience - centered model", Reference Services Review, Vol. 33 No. 1, (2005), pp. 66-87. <https://doi.org/10.1108/00907320510581397>

⁴ "pathfinder". ALA Glossary, p.189. [国立国会図書館請求記号: UL2-B20]

⁵「パスファインダー」以外の名称で提供することも多い。たとえば米国議会図書館で1972年から2013年にかけて不定期刊行されたパスファインダーの名称は、Tracer Bullets (曳光弾)だった。2014年以降はLibrary of Congress Research Guidesに改称し、後述のLibGuidesを用いて1,396件(2022年11月9日現在)のパスファインダーを公開している。 <https://guides.loc.gov/>

者の調べ物のガイドとして、一枚もののリーフレットや、ウェブサイトでのコンテンツとして提供され、レファレンスサービスのツールとなっている。

1.1 パスファインダーの利点

パスファインダーには、どのような利点があるだろうか。

利用者にとっては、(1) カウンターまで行って相談する手間が省ける、(2) 単純なインターネット検索では得られない情報源まで簡便にわかる、(3) 本人が気付いていない、あるいは言語化できていない情報要求を明確化できる、などの利便性がある。

一方、図書館側にとっても、(1) 何度も繰り返し尋ねられるような事項のレファレンスの時間を節約できる、(2) 偶然目にふれることで潜在的な利用者へも届く、(3) どのカウンター担当者でも均一な対応ができるようになる、(4) 利用者ガイダンスや授業で利用できる、(5) 協力レファレンスの依頼先など、他館のパスファインダーを参照することで、自館では所蔵していない有用な資料の存在に気付くことがある、など多くの利点がある。こうしたことから、図書館でパスファインダーの整備が進められてきた。

2 パスファインダーの構成

作成機関によって、多様な構成が見られるが、概ね下図のような要素を含むものが多い。

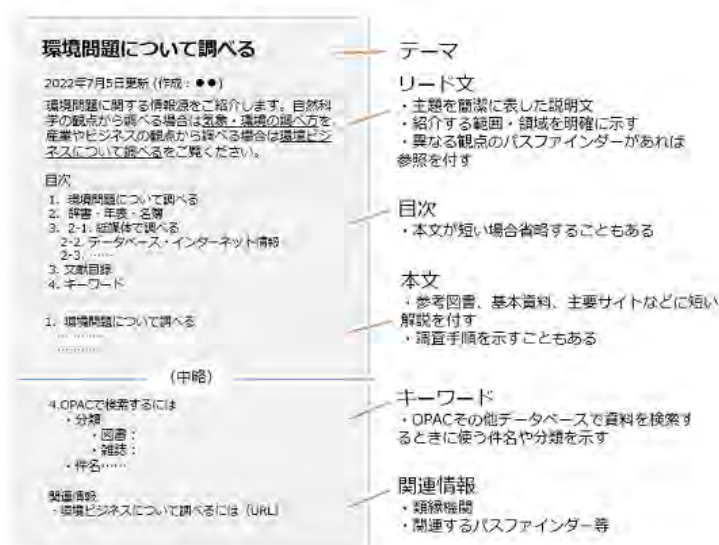


図1 パスファインダーの主要要素（複数館のパスファインダーを参考に作成）

ウェブ上でのみ公開するパスファインダーの場合、紙1枚に収めなくてもよいから、紹介する参考図書やリンクなどを増やすことができる。ある程度長さのあるパスファインダーでは、冒頭に適切なリード文と目次を置くことで、利用者がそのパスファインダーが自分に必要なものかどうかを一目で判断することができ、有効である。

3 提供方法

パスファインダーはもともと一枚ものの利用者向けのリーフレット形式から始まったが、現在では図書館等のウェブページやデータベース形態でも提供されるようになり、来館者だけでなく、非来館者にとっても調べ方を調べる有効なツールになっている。

パスファインダーをウェブで公開する場合、図書館のウェブサイトコンテンツの一つとして作成・公開することが多いが、ウェブページ作成に関する知識が必要となる。また、作成を比較的容易にするコンテンツ管理・提供サービスを使うという方法もある。こうしたサービスの代表的なものが、2022年11月10日現在、104の国と地域にわたる約5,858機関（うち日本国内13機関）で導入されている、米国 Springshare 社の LibGuides である⁶。「ガイド」と呼ばれるパスファインダーを、ウェブブラウザのみで簡単に作成できるだけでなく、他館の作成したデータを再利用できる機能や、ラウンジというパスファインダー作成者の意見交換の場の提供などの機能がある⁷。

日本国内では、LibGuides のようなサービスは広く普及していないが、国立国会図書館と全国の図書館等計 894 館が協同で構築しているレファレンス協同データベース⁸がある。同データベースの4種のデータ種別の一つに「調べ方マニュアル」があり、2022年10月現在、11,866 件が登録されていて、本特集におけるパスファインダーにあたるデータも多く含まれる⁹。うち、4,518 件が一般公開されており、後述の「リサーチ・ナビ」の検索窓でも検索できる。

4 日本国内におけるウェブ上でのパスファインダー

国立国会図書館では、2008年3月に都道府県立・政令指定都市立図書館及び一部の大学図書館を対象に行われた調査¹⁰をもとに、「公共図書館パスファインダーリンク集」¹¹が作成され、その後も維持・更新されている。これによると、都道府県立図書館36館と政令指定都市立図書館14館がウェブ上でパスファインダーを公開していることがわかる^{12 13}。これ

⁶ LibGuides. <https://springshare.com/libguides/>

⁷ 藤田千紘. ウェブ上で提供される調べ方案内の展開：米国での実践を中心に. カレントアウェアネス. 2019, (341), CA1962, p. 20-23. <https://doi.org/10.11501/11359095>

⁸ 国立国会図書館. レファレンス協同データベース. <https://crd.ndl.go.jp/reference/> 2022年10月末現在、専門図書館では67館、支部図書館及び分館では12館が参加している。

⁹ 国立国会図書館. レファレンス協同データベース事業 事業統計（2022年10月末現在）.

https://crd.ndl.go.jp/jp/library/documents/stats_202210.pdf

¹⁰ 伊藤白, 小澤弘太. 国内における Web 上パスファインダーの現況調査. 情報の科学と技術. 2008, 58(7), p. 361-366. https://doi.org/10.18919/jkg.58.7_361

¹¹ 国立国会図書館. リサーチ・ナビ「公共図書館パスファインダーリンク集」.

<https://rnavi.ndl.go.jp/guides/pubpath.html>

¹² 大学図書館を主とするパスファインダーのリンク集として、私立大学図書館協会東地区部会研究部研究分科会による「パスファインダーバンク」が挙げられるが、最終更新日は2008年4月23日である。

https://www.jaspul.org/pre/e-kenkyu/kikaku/pfb/pfb_frameset.htm

¹³ 専門図書館のパスファインダーには「統計データ FAQ」（支部総務省統計図書館、<https://www.stat.go.jp/library/faq/faq-index.html>）や一般社団法人日本自動車工業会自動車図書館がレファレンス協同データベースで公開している調べ方マニュアル

(https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlerdsearch/index.php?page=detail_list&type=manual&mc)

らは、来館利用が困難な遠隔地からでも閲覧でき、利用者の調査を支援するものである。

パスファインダーは個々の図書館のサイトや、先述の LibGuides で公開されるだけでなく、さらにレファレンス協同データベースにも重ねて公開・リンクされるケースも見受けられる。九州大学附属図書館では LibGuides で作成したデータをレファレンス協同データベースの「調べ方マニュアル」としても公開した結果、レファレンス協同データベース事業の公式 Twitter で紹介されたデータや一般的な学習に関連したデータへのアクセスが増え、従来とは異なる利用者層にも情報が届くようになったと考察されている¹⁴。

様々な図書館が公開しているパスファインダーを探すには、より簡便な方法として、Google などの検索窓に「〇〇 調べ方」のように入力して検索するとウェブ上で図書館が公開したパスファインダーが上位に表示される¹⁵。網羅的とはいいがたいが、図書館のサイト内やレファレンス協同データベースをそれぞれ検索する手間も省けて便利なので、日ごろ図書館を利用しない方々にもおすすめしたい。

5 国立国会図書館におけるウェブ上のパスファインダーの変遷

国立国会図書館でのウェブ上のパスファインダーとしては、2002 年から「テーマ別調べ方案内」（当時）をウェブ上で公開したのを嚆矢とする。その後、2009 年 5 月「リサーチ・ナビ」という形での他のサービスとの統合があり、何度かのシステム更新を経て、2022 年 7 月にリニューアルした。リニューアルの詳細については、本特集の「リサーチ・ナビ」のリニューアル」を御覧いただきたい。

かつて、国立国会図書館では、頻繁に問合せを受ける事例や業務のメモを、1 事項につき 1 枚の京大式カード（厚手の B6 サイズのカード）に記入し、ボックスに入れて閲覧カウンター等で職員の間で共有していた。これを職員用のデータベースとして整備したものが元になり、ウェブ上でのパスファインダーの公開につながった。出発点が職員間のナレッジ共有だったということは、通常最初から利用者向けの案内を意図して作成される一般的なパスファインダーとは異なる特徴であろう¹⁶。

今回のリニューアルで「調べ方案内」の名は見えなくなったが、「リサーチ・ナビ」は、日本最大級のパスファインダー集積サイトとなっている。約 1,800 件のパスファインダーのほか、主題データベース、リストやリンク集的な記事もあり、横断検索が行える。

[md=25&st=update&asc=desc&dtlts=1&tt=4200004&tt_lk=1&tcd=4200004&tcd_lk=1](#)) 等がある。今回は全国の公開型専門図書館におけるパスファインダーの公開状況について網羅的な調査ができなかった。今後の機会を待ちたい。

¹⁴ 星子奈美, 渡邊由紀子. 図書館 TA とともに創るパスファインダー: 九州大学附属図書館の Web 学習ガイド Cute.Guides を例に. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2020, vol.2019/2020, p.27-36.

<https://doi.org/10.15017/4061015>

¹⁵ 小林昌樹. 在野研究者のレファレンス・チップス. 第 13 回パスファインダー（調べ方案内）の見つけ方. 皓星社 https://www.libro-koseisha.co.jp/webcolumn/reference_tips13/

¹⁶ 2009 年の公開に至るまでの経緯は以下を参照。

兼松芳之. リサーチ・ナビとは リサーチ・ナビの概要: 機能、構成、歴史. 参考書誌研究, 71. 2009.11. p.2-32 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/3051610/1>

6 専門図書館とパスファインダー

専門図書館（支部図書館を含む）でもパスファインダーがあるといいよ、という違和感を持たれるかもしれない。専門図書館の場合、当該分野に関する知識をある程度持つ利用者が多いため、初心者向けのパスファインダーは不要、また、カウンターでは国立国会図書館のような大規模館のパスファインダーがあるから十分との声も聞く。しかし、ここまで述べてきたように、公開型専門図書館では、どのような調べ物ができるのかという広報資源になるし、外部公開していない専門図書館でも、イントラネットや社内報で紹介することにより、組織内のサービスの向上と広報につなげることができる。パスファインダーがあれば、不慣れな分野を調べるときでも、カウンタースタッフの手を借りずに自力である程度調査できる範囲が広がる。また、慣れている分野であってもパスファインダーで調査すべき情報源に見落としがないかを確認することもできる。

よく紹介する定番の資料をまとめ、定期的に更新すれば、少人数の図書館でスタッフが入れ替わる際でもサービスのレベルを大きく下げることなくカウンター業務の引継ぎを行い、レファレンスサービスのレベルの維持が可能となる。利用者のためだけではなく、スタッフ間の引継ぎにも重要な財産となり、結果的にサービスの向上にもつながるだろう。

レファレンス記録の蓄積を通じて、パスファインダーの重要さに気付くことも多い。まずは試しに作成してみてはいかがだろうか。

（よしま さとこ）

【調べ方を調べる】

「リサーチ・ナビ」のリニューアル

—さらに調べ方を調べやすく—

国立国会図書館利用者サービス部サービス企画課 宇野 亮一

1 はじめに

図書館利用者を支援するために、「調べ方を調べたい」と思ったとき、皆様はどう調べるだろうか？公共事業に関する統計にはどんなものがあるのか¹、有名な外国文学の邦訳らしい『二年間の休暇』なる小説の原題は何か²、アメリカ合衆国の選挙はどう行われるのか³……どんな図書館員でも、全ての調べ方を頭の中に収めておくことは難しいだろう。そこで使っていただきたいのが、リサーチ・ナビだ。

1.1 リサーチ・ナビとは？

リサーチ・ナビは、国立国会図書館が調査に役立つ情報を蓄積し、整理・体系化してウェブ上に提供し、求める情報に利用者を案内するサービスである。さまざまな専門分野の質問に日々答えている職員たちが、業務の中で蓄積された知識をまとめている。調査のポイントや参考になる資料・便利なデータベース・使えるウェブサイト・関係する機関など、調べものに役立つ情報を、特定のテーマ・資料群別に紹介している。一人で幅広い分野それぞれに深い専門性を備えた、いわば「スーパー図書館員」に頼ってしまうのではなく、多くの職員の知識を継続的に集約することで、多くの分野の「調べ方を調べる」ことができるようになる。

1.2 リニューアルとは？

そんなリサーチ・ナビは、令和4年7月にリニューアルを行った。長らく「調べ方案内」「テーマ別データベース」「専門室のページ」の三つの柱に沿って構成していたが、令和4年7月により利用者が直感的に使いやすい構成を目指し、サイト構成やデザインを改めた。皆様にリニューアル後のリサーチ・ナビの特徴を理解していただき、いっそう便利に使っていただけるよう、要点をご紹介します。

* 本稿におけるインターネット情報の最終アクセス日は、2022年12月1日である。

¹ リサーチ・ナビ (<https://rnavi.ndl.go.jp/>) では、以下の記事などが参考になる。「公共事業に関する統計」 https://rnavi.ndl.go.jp/ip/guides/post_866.html

² 以下の記事で紹介されている翻訳図書の手帳で邦題から原題を確認する方法がある。「外国文学の邦訳を探す」 https://rnavi.ndl.go.jp/ip/guides/post_493.html

³ 米大統領選挙や連邦議会選挙の概要などは以下の記事で解説されている。「アメリカ合衆国・選挙結果（大統領、連邦議会）」 https://rnavi.ndl.go.jp/ip/guides/post_650.html



図1 リサーチ・ナビトップページ

2 構成

今回のリニューアルでは、リサーチ・ナビの多様な記事を、「主題から調べる」「資料の種類から調べる」「テーマ別データベース」「「探す」ギャラリー」の4種類のコンテンツに再編した。

2.1 ウェブならではの構成

資料の配置上は、専門分野やデジタル化の進捗状況によっては京都府の関西館に所蔵されている資料もあるし、児童書の多くは同じ東京都内とはいえ永田町の東京本館ではなく上野の国際子ども図書館に配置されているが、ウェブから「調べ方を調べる」場合には物理的な配置場所は関係ない。そのため、当館の専門室等の施設・業務の所掌・資料配置に対する理解などを前提とせず、純粋に調べ方そのものを調べられるように再編している。

2.2 グローバルナビゲーション・パンくずリスト

また、検索エンジンから個別ページに直接アクセスする利用者也、4種類のコンテンツそれぞれと上位の階層などに気づけるように、全ページの上部にグローバルナビゲーション⁴・パンくずリスト⁵を備えている。

たとえば、「日本一政治家について調べる」という「主題から調べる」コンテンツの一つに辿りついて、資料の種類から調べる方法も考えられること⁶、上位の階層は「日本の議会」

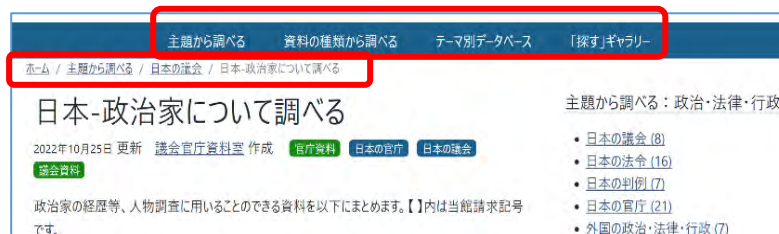


図2 グローバルナビゲーション（上）・パンくずリスト

⁴ ウェブサイト内の各ページに共通して設置される、サイト全体の構成とリンクを確認できる領域。

⁵ ウェブサイト内の各ページの位置を、階層構造を持った形で示すもの。

⁶ 例えば近現代の政治家などが所蔵していた資料を旧蔵者別に整理した「憲政資料」の調べ方は、「資料の種類から調べる」のほうから確認できる。

であり、そこから他の記事も探せるかもしれないこと、などにも気づけたほうが望ましいだろう。

2.3 カテゴリ名などの改善

4 種類のコンテンツそれぞれに含まれるカテゴリ名や階層の深さ、並び順なども、使いやすいように見直しを行った。「調べ方一般」や「アーカイブ」などというあまりに一般的すぎるカテゴリ名だと、何のことか分からず見てみようという気が少し削がれるかもしれないし、分類されていることは大切とはいえ、あまりに細分化されて深い階層になってしまっていると見て回るのが大変になってしまうためだ。

現在は「政治・法律・行政＞日本の議会」「自然科学＞技術・工学＞食品工学」など、各コンテンツ内では2～3階層程度とし、イメージしやすいカテゴリ名にするよう心掛けている。また、一つの記事が複数の切り口から捉えられることもあるので、一つの記事にカテゴリは複数設定できる。

主題から調べる				
特定テーマ・トピックの調べものに役立つ資料や調べ方のノウハウをご案内しています。				
全般	政治・法律・行政	社会科学	自然科学	人文科学
新型コロナウイルス 13	日本の議会 8	経済・産業 1	科学全般 6	人文リンク集
東日本大震災 5	日本の法令 16	経済・金融・財政を調べる 15	自然科学	歴史 52
総記 2	日本の判例 7	企業を調べる 16	数学 2	地理・民族・風俗 15
統計 21	日本の官庁 21	産業情報ガイド	天文学・宇宙科学 3	哲学・宗教 11
分野別統計書 32	外国の政治・法律・行政 7	土地・路線価 11	物理学 2	芸術・美術・建築 31
人物情報 36				音楽 27

図3 階層の例

2.4 「探す」ギャラリーの新設

「探す」ギャラリーは、リニューアルで新しく拡充したコンテンツだ。国立国会図書館が提供する多様なデジタル化資料へのアクセスを提供し、リサーチ・ナビ自体に加え、他の当館作成電子展示などの利用促進につながることを期待している。また、各館の現物展示についても、書誌や画像に簡単な解説をつけ、紹介できるようになった。

3 よりブラウジングしやすく

ブラウジングとは、書架やウェブページを見て回ることだ。資料が整理された本棚に実際に足を運ぶことで、目録などで探すだけでは気づかない関連情報を発見できた経験は、図書館員なら誰にでもあるのではないだろうか。それと似たユーザーエクスペリエンスを、リサーチ・ナビでもできるようにするというのが、今回のリニューアルの一つの目的だ。

3.1 記事から関連カテゴリ等へブラウジング

具体的には、一つ一つの記事に、関連するカテゴリの一覧や他の情報源へのリンクを表示するようにしている（概ね画面右側に表示されるが、4 で後述するように、スマートフォンでは別様に表示される）。

たとえば「外国文学の邦訳を探す」という記事であれば、「主題から調べる：人文科学」「主題から調べる：全般」に属するカテゴリの記事一覧へのリンクや、「日本人名情報索引（人文分野）データベース」などへのリンクが表示される。邦訳した翻訳者の情報が知りたい、などという目的がある場合には、リンクを辿ってブラウジングができるというわけだ。

外国文学の邦訳を探す

2022年6月 8日 更新 人文総合情報室 作成 [言語・文学](#)

国立国会図書館オンラインのキーワード欄に邦訳タイトルを入力して検索すると、図書として刊行されたもの、図書の一部や雑誌などに収録されたもののうち、目次が採録されているものについて検索できます。

ここでは、邦訳タイトルがわからない（正確ではない）場合、国立国会図書館のデータベースに目次が採録されていない場合など、上記の方法で見つからないときの探し方を紹介します。

書誌事項末尾の【 】内は当館請求記号です。

1. 国立国会図書館オンライン
 - 1-1. 原タイトルで探す
 - 1-2. 作者名で探す
2. 翻訳書誌
 - 2-1. 全般
 - 2-2. 各国別
 - 2-3. ジャンル別
3. 文学全集から探す
 - 3-1. 作者名で探す
 - 3-2. タイトル（おもに邦訳）で探す

1. 国立国会図書館オンライン

主題から調べる：人文科学

- [人文リンク集](#)
- [歴史 \(52\)](#)
- [地理・民族・風俗 \(15\)](#)
- [哲学・宗教 \(11\)](#)
- [芸術・美術・建築 \(31\)](#)
- [音楽 \(27\)](#)
- [舞踊・演劇・映画 \(15\)](#)
- [言語・文学 \(36\)](#)

主題から調べる：全般

- [統計 \(21\)](#)
 - [分野別統計書 \(32\)](#)
- [人物情報 \(36\)](#)
- [名簿 \(13\)](#)
- [AsiaLinks-アジア関係リンク集](#)

テーマ別データベース

- [日本人名情報索引（人文分野）データベース](#)

図 4 関連記事・データベース等（PC で閲覧した場合は右側）

3.2 維持管理のしやすさ

また、この「関連するカテゴリの一覧」は、HTML を手動入力しているわけではない。「この分野の記事にはこれらのカテゴリを表示する」といったルールを定めることで、利用者が閲覧するたびに一覧を参照し、自動的に生成するようになっている。

手動だと、たとえば「歴史」というカテゴリを「歴史学」というカテゴリ名に変えたとき、「(もと) 歴史」カテゴリが右側に表示されている全部の記事を手動で修正する必要があり、多大な労力を要する。そうではなくルールに沿って自動的に生成・更新されることで、利用者もリンク切れなどに悩まされず、ブラウジングがさらにしやすくなる。

そして自動生成されることで、必要に応じて新しいカテゴリを設定したり、一つの記事に複数のカテゴリを付与したりすることも、作業量を心配せず行える。今後もカテゴリの柔軟な付与・改善によって、よりニーズに沿った構成、ブラウジングしやすいリサーチ・ナビを目指したい。

3.3 リサーチ・ナビ以外へもブラウジング

なお、「近代日本人の肖像」⁷など調べ物にも有用な当館の電子展示会へのリンクや、東日本大震災のカテゴリであれば震災記録等のポータルサイト「国立国会図書館東日本大震災



図 5 リサーチ・ナビ以外へのリンク

⁷ <https://www.ndl.go.jp/portrait/>

アーカイブ（ひなぎく）⁸」へのリンクなども、記事の種類に応じて関連項目に表示されるようにしている。リサーチ・ナビだけに限定せず、当館サービスを使いこなしていただければ幸いである。

4 誰でも・どこでも利用しやすく

調べ方を調べる必要は、いつどこで生じるか分からない。出張先や出勤中、あるいは仕事とは関係なく趣味の世界であっても、リサーチ・ナビにアクセスしたいと思うことは多い（と期待したい）。モバイルで活用できるスマートフォンでの閲覧に対応することが、そうしたニーズに応える一つの手段となる。

4.1 レスポンシブウェブデザイン

そのためにレスポンシブウェブデザイン⁹を導入し、利用者が使っているデバイスやブラウザに応じた表示ができるようにした。PCのウェブブラウザで見ると横6列に並ぶ情報が、スマートフォンのように横幅の狭い機器でアクセスした際には2列に並び、縦にスワイプすることで順を追って見ていくことができるといった、柔軟な対応が行える¹⁰。



図6 （左）PCで閲覧した画面、（右）スマートフォンで閲覧した画面

3.1で述べた「関連するカテゴリの一覧」等も、スマートフォンでは画面右側ではなく記事の下部に表示される。

外国文学の邦訳を探す

2022年6月8日 更新 人文総合情報室 作成 言語・文学

国立国会図書館オンラインのキーワード欄に邦訳タイトルを入力して検索すると、図書として刊行されたもの、図書の一部や雑誌などに収録されたもののうち、目次が採録されているものについて検索できます。

ここでは、邦訳タイトルがわからない（正確ではない）場合、国立国会（中略）

主題から調べる：人文科学

- 人文リンク集
- 歴史 (52)
- 地理・民族・風俗 (15)
- 哲学・宗教 (13)
- 芸術・美術・建築 (31)
- 音楽 (27)
- 舞踊・演劇・映画 (15)
- 言語・文学 (36)

図7 スマートフォンで閲覧した場合の関連情報（図4と比較）

⁸ <https://kn.ndl.go.jp/#/>

⁹ パソコン用・スマートフォン用に個別のページを作るのではなく、一つのページで対応するデザイン。ブラウザの幅などに応じて表示を自動的に切り替える。

¹⁰ ただし、統合検索の検索結果一覧画面など、一部はレスポンシブデザイン未対応である（といってもスマートフォン等で見られないわけではないが、単純に縮小表示されてしまう）。今後の課題としたい。

4.2 ウェブアクセシビリティ

また、視覚に障害のある方などに対しても、必要な情報を提供できるウェブアクセシビリティ¹¹への配慮が非常に重要だ。誰にでもそれぞれのニーズに沿った形態でリサーチ・ナビを利用してもらえるよう、記事の構造を表す HTML を適切に設定するように努めている。

HTML で構造を示すことで、音声ブラウザでテキストが読み上げられる際に、「見出し」「表」などが正しく認識され、それに沿って表現される。“文字を大きくする”といった「見た目」ではなく、“見出しである”という「意味」を定義することで、視覚で情報を認識する利用者に対してはいわゆる通常のブラウザが、音声で情報を認識する利用者に対しては音声ブラウザなどが、意図どおりに伝わる形で表現してくれるのだ。

なお、意味を適切に定義することは、検索エンジンに対しても意図が伝わりやすくなる効果もある。それによって、目次や見出しなど、その記事の特徴が認識され、関連する検索語で検索した利用者に表示されやすくなる。ディレクトリやファイル名も同様に、「map」「newspaper」など、できるだけ内容を反映するものに改めている。

5 さらに改善に向けた利用者ニーズの把握

5.1 利用者アンケート

7月のリニューアルと同時に利用者アンケート¹²を開始し、3か月間実施した。これまでもリサーチ・ナビを活用していた利用者がリニューアルをどう受け止めたのか、逆に初めてリサーチ・ナビを知った利用者はどんな視点をもたらしてくれるのか、調査するために適切なタイミングであったと思う。

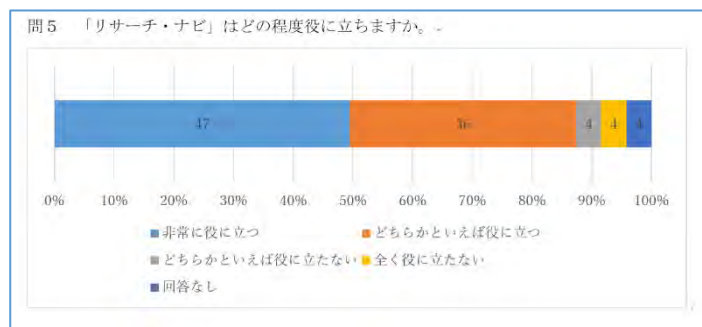


図8 アンケート結果の一部

5.1.1 探索行動の変化

以前のデザインに基づいた、令和元年度のアンケートと比較すると、一つ大きな変化として挙げられるのが、リサーチ・ナビ内の情報をどのように探したかという探索行動だ。

令和元年度は「リサーチ・ナビの検索機能を用いた」という利用者が多かったが、今年度リニューアル後は「リサーチ・ナビ内をブラウジングした」「検索エンジンから直接見に来た」と回答する利用者が増加した。既述のとおり、ブラウジングや検索エンジンで見つかりやすくする対応は今回リニューアルの重要なポイントであり、効果がアンケートに現れたことは喜ばしい。

5.1.2 利用者満足度

幸いなことに、リサーチ・ナビを「非常に役に立つ」と評してくれたのが52%、「どちらかといえば役に立つ」も40%と、全体の9割以上が好意的であるなど、満足度は高かった。一方

¹¹ ウェブページの情報へのアクセスしやすさ。視覚でアクセスできない利用者でも読み上げソフトでアクセスできる、色遣いや文字サイズに配慮することで色覚障害や弱視の利用者でもアクセスできるなど。

¹² 国立国会図書館、令和4年度「リサーチ・ナビ」利用者アンケート結果報告について（2022年12月1日）。https://rnavi.ndl.go.jp/rnavi/jp/enquete_r4.html

で検索ボックスの位置を改めてほしいなどの指摘もあり、さっそく反映した意見もある。もちろん、今後も継続的に維持管理を行っていくことが大切だと考えている。

5.2 アクセス解析

利用動向を把握して改善につなげるためには、アクセス解析も重要だ。もちろん、データを匿名化して扱うことが大前提となる。リニューアルの少し前、令和4年4月からアクセス解析のシステムを変更し、より実態に即したデータが採取できるようになった。

検索語や閲覧されたページを統計的につかみ、求められていると考えられる記事を作成・アップデートしたり、トップページで推すコンテンツを入れ替えてみたりと、利用者ニーズに即したサイト構築に役立てている。

6 メンテナンス

3.2 でも少し触れたとおり、メンテナンスが簡単に行えないとニーズに即したサイト構築をすることは難しい。記事一覧の作成を自動化したり、「関連情報」という項目を用いれば指定したリサーチ・ナビの記事名が変更されたとき自動的に連動するようにしたりと、メンテナンスを行う各部門の労力をできるだけ削減できるような仕組みを導入している。

また、国立国会図書館デジタルコレクションのインターネット公開資料から IIIF¹³で画像を切り出す、ジャパンサーチ¹⁴でリストを作りウェブパーツとしてエクスポートする機能を使うなど、更新作業の手間を低減するとともに当館の多様なサービスをさらに知ってもらうための工夫もしている。

最初にも述べたとおり、リサーチ・ナビは一人のスーパー図書館員ではなく、記事作成に係る¹⁵以上の課室に所属する多くの職員の知識を継続的に集約することで、広い分野のコンテンツを提供しているサイトだ。メンテナンスが容易であること、作業手順が分かりやすいことは、多くの職員が携わるために不可欠と言えるだろう。記事作成時に配慮すべきウェブアクセシビリティの研修を実施する、執筆の手引きやマニュアルを整備するなど、リサーチ・ナビの情報をしっかりと整備された形で提供し続けるために必要な、運用面での改善も行っている。

7 おわりに

このような特徴を備えて、リニューアルを遂げたリサーチ・ナビだが、さらに便利なサイトになっていくためにはリサーチ・ナビを利用してくださっている方々からのレスポンスが不可欠だ。利用者アンケートは終了してしまったが、ご意見・希望する記事などがあれば、各ページのフッタにある「お問い合わせ」から、フォームを使って送信していただきたい。

また、リサーチ・ナビは令和4年2月に CC BY 互換の利用規約¹⁵を設定したため、一部のコンテンツを除き、自由に利用すること

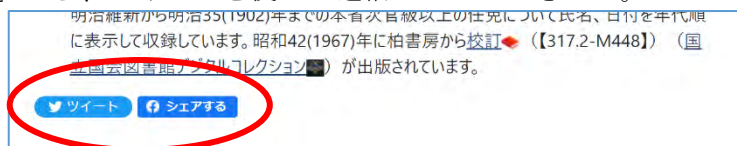


図9 SNS 投稿ボタン

¹³ International Image Interoperability Framework デジタルアーカイブに収録されている画像を中心とするデジタル化資料を相互運用かつアクセス可能とするための国際的な枠組み。IIIF に対応する画像は IIIF ビューア上で一律に扱える。

¹⁴ <https://jpsearch.go.jp/>

¹⁵ <https://rnavi.ndl.go.jp/jp/about/terms.html>

ができる。リニューアル時には各ページに Twitter・Facebook への投稿ボタンも設置したので、クリックすると、そのページへのリンクを含んだ SNS 投稿を簡単に行うことができる。さまざまな発想でリサーチ・ナビを使いこなしてもらえれば、このサイトを知る人がより増えてくれる、ということだ。

英語版“Research Navi”¹⁶も、デザイン面は一足早く、昨年度にリニューアルした。英語版は英語で「調べ方を調べる」利用者に向けた独自の記事もあるが、日本語版のコンテンツすべてに対応する英語版があるという段階ではなく、日本語版に比べるとさらに充実の余地がある。今後は調べ方案内やテーマ別データベースで機械的に翻訳できるものは自動的に英語版に反映させるなどの手法も検討し、コンテンツを充実させて、さらに広い範囲に情報を届けられるようにしたい。



図 10 英語版 “Research Navi”

「調べ方を調べる」ためのサイト、リサーチ・ナビをこれからも是非活用していただきたい。その一助となるべく、リニューアルのポイントを説明してきた。国立国会図書館のさまざまな部門の職員によって作り上げられているリサーチ・ナビによって、皆様の今後のリサーチがもっと便利なものとなることを願っている。

(うの りょういち)

¹⁶ <https://rnavi.ndl.go.jp/en/index.html>

【調べ方を調べる】

大阪大学附属外国学図書館の パスファインダー「るくぱす」

大阪大学大学院 言語文化研究科 博士後期課程 中村 瑞樹

1 はじめに

大阪大学附属図書館（以下、「阪大図書館」という。）では、館内のラーニング・コモンズ¹等に大学院生ラーニング・サポーター（以下、「LS」という。）を配置し、学生のアカデミックスキル支援等を行っている。本稿のテーマである LS によるパスファインダー（テーマ別調べ方ガイド）執筆は、その一環である。

筆者は、外国学図書館で 2019 年度から LS として従事している。本稿では、LS の視点から阪大図書館におけるパスファインダーの運用について紹介していく。なお、内容については、阪大図書館職員によるチェックを事前に受けていることを申し添えておく。

2.1 阪大図書館における大学院生 LS の活動

まず、阪大図書館全体における LS の取り組みについて軽くご紹介したい。大阪大学には豊中（文・法・経済・理・基礎工）、吹田（医・歯・薬・工・人間科学）、箕面（外国語）の 3 キャンパスがあり、カッコ内の学部が各キャンパスに位置している。附属図書館は阪大全体に四つあり、豊中に総合図書館、吹田に理工学図書館と生命科学図書館、そして箕面に外国学図書館が設置されている。他にも各キャンパス・研究科内に小規模の図書室がいくつか設置されている。

阪大図書館では 2009 年度から、学部生の学習支援などを目的に、LS の配置を行っている。現在（2022 年度）は総合、理工学、外国学の三つの図書館に配置されており²、授業期間中の平日日中に図書館のラーニング・コモンズ等、所定のスペースで従事している。各館ともに対面での学習支援や、LS 企画の講習会の実施などをしており、新型コロナウイルス感染症拡大後は、Zoom や Webex、Slack を用いたオンラインでの支援も実施している³。

本稿のテーマであるパスファインダーの作成も 2010 年度から行っている。完成したパスファインダーは図書館内で紙媒体のものを配布するとともに、阪大図書館のウェブページでも公開しており、PDF をダウンロードできるようになっている⁴。2022 年 11 月現在で、217 件のパスファインダーがダウンロード可能である。

*本稿におけるインターネット情報の最終アクセスは、2022 年 11 月 16 日である。

¹ 学生の学習支援を意図して大学図書館に設けられた場所や施設。具体的には、情報通信環境が整い、自習やグループ学習用の家具や設備が用意され、相談係がいる開放的な学習空間（『図書館情報学用語辞典』第 5 版、日本図書館情報学会用語辞典編集委員会 編、丸善出版、2020 年 8 月、p.251. [国立国会図書館請求記号：UL2-M7].）

² 現在（2022 年 11 月）で、総合図書館に 16 名、理工学図書館に 7 名、外国学図書館に 7 名配置されている。

³ LS の活動内容の詳細については、以下のサイトをご確認いただきたい。

<https://www.library.osaka-u.ac.jp/research/ta/>

⁴ <https://www.library.osaka-u.ac.jp/research/pathfinder/>

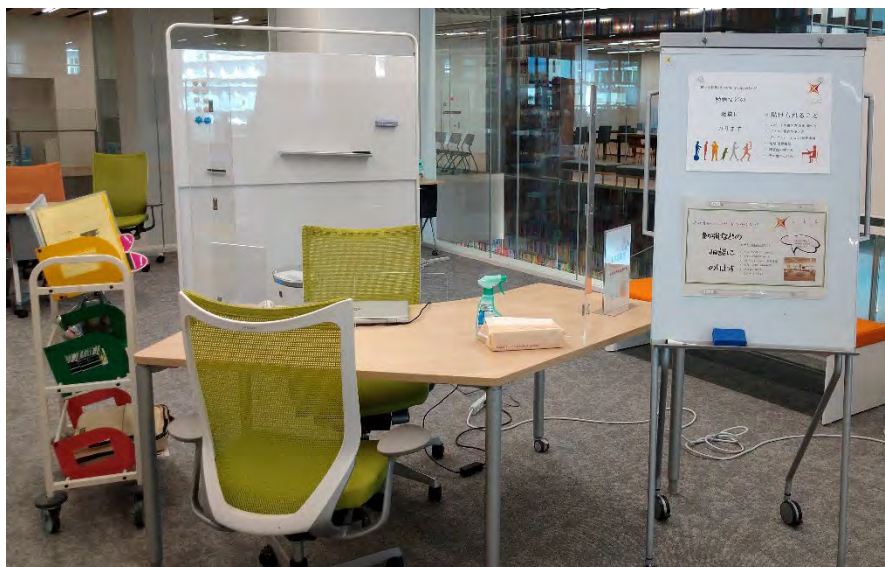


写真1 ラーニング・コモンズのサポートデスク

2.2 外国学図書館におけるLSの活動

ここで、筆者が従事する外国学図書館でのLS業務内容について、もう少し掘り下げてご紹介したい。

・対面（オンライン）による学習支援

外国学図書館が位置する箕面キャンパスは、学部は外国語学部だけのキャンパスであり、相談者のほとんどは外国語学部の学生、もしくは留学生である。学生からの相談内容としては、ゼミ発表や卒論執筆に関するもの、大学院進学に関するものが多い。また、外国語学部特有かもしれないが、留学に関する相談の頻度も高い。また、留学生から日本語ライティングの添削を依頼されることも多い。外国籍のLSも勤務しているので、中国語や韓国語、ドイツ語などの支援を行った例もある。

・講習会の実施

外国学図書館でも、これまで様々な講習会を実施してきた。例えば、アメリカ文学専門のLSによる、自身の研究内容に絡めアメリカ文化を紹介する講習会や、留学経験のあるLSが体験談を伝える講習会、さらには、外国籍LS主催の外国語会話練習会などを実施してきた。筆者は主に論文・資料検索といったアカデミックスキル向上を目指す講習会を行ってきた。講習会の実施は、図書館職員が作成する年間計画に沿う場合もあるが、LSが自らの得意分野や学生に伝えたい内容で立案し、実施することが多い。

3 LSによるパスファインダーの作成の流れ

さて、ここからは本題の外国学図書館で発行しているパスファインダー「るくぱす」についてである。

まず、「るくばす」という名称は、当館のラーニング・コモンズの名称が、外国語学部の学部章に記載されている“EX ORIENTE LUX ET PAX”「光と平和は東方より」⁵から取った「るくす」であることに由来する。つまり、この「るくす」と「パスファインダー」の頭文字を合わせた造語である。館内では 3F に頒布用スタンドがあり、利用者が自由に手に取ってみたい、持ち帰ったりできるようになっている。



写真 2 るくばすの置かれたスタンド

外国学図書館の LS は、毎週固定の曜日に 2～3 時間従事というスケジュールで、学習支援や相談対応など他の業務がない時間帯にるくばすの執筆を進めている。るくばすのテーマは、「卒業論文にとりかかる」「参考文献の書き方」「研究計画書の書き方」といったものから、特定層をターゲットとした「日本語を教える」「映画を通して知るアメリカ」「ロシア映画特集」「ペルシア文学への誘い」など、執筆者の専門が色濃く反映されたものまで幅広く存在する。内容としては、LS が自身の言葉で説明を記載することもあれば、テーマに挙げた分野の必読書・参考図書を紹介するスタイルのものもある。講習会の内容をるくばすにまとめ直し、公開するという形もある。

新規のるくばすを作成する際は、各 LS が自らの興味や専門分野に合わせて書きたいものを書くというのが通例である。他にも、図書館職員から依頼されたテーマについて執筆するケースや、採用直後の LS に登竜門として書いてもらおうというケース、内容が一部古くなったるくばすを更新・改訂するケースもある。筆者はるくばすを書くよりも、対面で講習会を行う方が好きなので、後者を選んできた節があるが、私の先人には大量のるくばすを一人でこの世に送り出してきた偉人もいる。LS 全員が、一人あたり半期に一つ新規を執筆するか、過去のものを

⁵ https://www.sfs.osaka-u.ac.jp/outlines/symbol_rule.html#symbol_rule

1～2 点改訂・更新するという目標があった時期もある。いずれにせよ、基本的には LS が単著で執筆することになるので、図書館職員と相談しテーマを決めた後は、各自従事時間内に原稿を書いていくという流れになる。

るくばすの書式については、テンプレートが代々受け継がれており、それに合うようにデザインしていくことになる。原稿が完成した後は、図書館職員や他の LS からのフィードバックを受けたうえで、さらに推敲作業を重ね、最終稿を提出する。テーマの決定から完成までは 2～3 か月がかかることが多い。



写真 3 るくばす（文学）

4 パスファインダー執筆を大学院生 LS が行う意義

ここで、パスファインダー執筆を大学院生が行う意義について、「るくばす」の作成に携わった LS の立場から言及しておきたい。まず述べるべき意義は、自らの学部生時代の経験を活かし、学部生に寄り添ったパスファインダーを執筆できることであろう。筆者含め多くの LS が大阪大学の学部を卒業しており、「阪大生による阪大生のためのるくばす」が作成可能になっている。るくばすではなく講習会のエピソードで恐縮だが、筆者は外国語学部卒業という立場を生かし、「外国語学部生のための～」と題した講習会をシリーズで開催してきた。たとえ出身学部が阪大でなかったとしても、同じ学問の道を歩む先輩として、LS 自身も様々な壁に直面してきた（いる）張本人であり、そういった視線から阪大生のニーズを洗い出し、彼らに寄り添った、彼らの役に立つるくばすを世に出すことが出来るのである。

余談だが、以前図書館職員から学部生が必要としている学習支援が何かについて相談を受けたこともある。LS が図書館の専門職員と実際に学業を行う学生との懸け橋として位置づけられるとすれば、るくばすがあることは、図書館職員にとっても学生のニーズに合った学習支援を提供する契機となるのではないだろうか。

また、るくばす執筆は LS 側にもメリットが大きい。言うまでもなく、一つのるくばすを書くには、その分野に精通しているだけでなく、学生に伝わりやすい表現で言語化する力を必要とする。つまり、るくばす執筆は、大学院生自らの研究者としての素養向上に直結する活動なのである。そして、自身の専門分野やアカデミックスキルについてさらに学び、知識を整理するチャンスにもなるのだ。加えて言えば、発行したるくばすは、図書館内だけでなくウェブサイトでも公開される。るくばすを外に出すには相当の責任が伴うわけであり、それを担うことも、論文書きとしての自己の素養を高めることに等しいと言えるだろう。

筆者の経験の一つ共有させていただきたい。これもまた、るくばす執筆時のエピソードではなく恐縮だが、「外国語学部生のための資料検索入門」という講習会を企画した時のことである。この講習会はタイトルの通り、外国語学部生向けに資料検索方法を 30 分でガイダンスするというものである。その企画の際に、担当の図書館職員から、私が知らなかった情報検索の

方法を多々ご教授いただいた。そのおかげで、筆者自身も幅広い資料検索力を身に着け、それが現在の博士後期課程での研究に生かされている。

このように、自身の経験を踏まえ、学部生に寄り添ったパスファインダーを執筆することは、学生の痒い所に手が届く情報を提供するだけでなく、LS 自らの専門分野、アカデミックスキルを顧みる機会ともなり、結果として大学院生、そして研究者の卵としての素養を向上させることにつながっているのである。もちろん、課題もいくつか残る。例えば、るくばすに限らず、LS という制度自体の認知度はまだまだ低い。他にも、発行したるくばすについても、紙版の増刷枚数のデータはあるものの、学生からどのように利用され、彼らの学習に役立っているかどうかなどについては、今後の調査が待たれるところである。こうした課題の一方で、LS 個人としては、今後も阪大生に寄り添ったパスファインダーを執筆していきたいと思うと同時に、1 部でも多くのパスファインダーが学生の手が届き、彼らの学習の支えとなることを願ってやまない。

(なかむら みずき)

「図書館資料の保存（簡易補修）」に参加して

支部内閣法制局図書館 隅田 知子

1 はじめに

令和4年7月8日、令和4年度行政・司法各部門支部図書館職員特別研修「図書館資料の保存（簡易補修）（以下、「簡易補修研修」という。）」を受講させていただきました。この研修は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中断されていましたが、今回、2年ぶりの開催となりました。この貴重な経験について、ご報告します。

2 研修の種類について

国立国会図書館が支部図書館職員向けに主催する研修は、大きく三つあります¹。まず、新規配属職員を対象とした図書館職員のいろはを学ぶことができる新規配属職員研修、次に、図書館の司書として利用者の様々なニーズに対応するための知識を学ぶことができる司書業務研修、そして最後に、今回の図書館資料の保存のための知識や実習による技術の習得等を学ぶことができる特別研修があります。

なお、現在の資料保存の考え方は、汚破損などが起こってからへの対処よりも、それらを防ぐ方を重視しています。このため、まず司書業務研修のうち2科目で予防保存の基礎を学び、その後、特別研修で簡易補修²を身につける、という順序になっています。

3 簡易補修研修について

3.1 初めて見る道具

国立国会図書館内の研修会場に入ると、図書館資料の軽微な破損の補修に必要な道具や紙、糊などが各テーブルに一人分ずつ用意されていました。また、研修会場の後方のテーブルには、図書館資料の予防保存や汚破損の対応に使われる様々な道具が展示されていました。ここまで色々な道具を一堂に見る機会はありませんでしたので、強く印象に残り、今後の図書館資料の保存にとっても参考になると感じました。

3.2 本の「のど」「ちり」？紙の目？

簡易補修研修が始まると、国立国会図書館収集書誌部資料保存課の講師の方々は、図書資料の各部名称を丁寧に説明してくれました。私は図書館に所属していますが、恥ずかしながら自

* 本稿におけるインターネット情報の最終アクセス日は、2022年10月11日である。

¹ 国立国会図書館総務部支部図書館・協力課「行政・司法各部門支部図書館職員研修の概要」『びぶろす』90号, 2021.6, pp.3-6. <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11676671/1>

² （編集注）今回の研修は、簡易補修研修は、遠隔研修「動画で見る資料保存：簡易補修」(<https://www.youtube.com/playlist?list=PLXvKjMC1JnVvrSqPUKKzKPqIRDY8X0wle>) とほぼ同内容で実施した。本稿で言及されている道具や紙、本の各部名称、作業手順はこの動画も参照されたい。

分が本に関する知識がこんなにも乏しいのかと痛感し、もっと本について知りたいと強く思いました。

皆さんは「紙の目」をご存じですか。実は、紙には製造する過程で一方に揃って並ぶ原料の繊維の流れがあります。それは、ページのめくりやすさや本の開きやすさに影響を与えます。そして、欠けたページを和紙で補うときなどは、「紙の目」を揃えて行っていきます。私は、図書館資料を扱う中で本によって開きやすさが違うものがあることは感じていましたが、その理由の一つが「紙の目」だとは思いませんでした。

欠けたページを和紙で補う簡易補修では、後述のように3種類（極薄、薄、厚）の和紙を使い分け、でんぷん糊の濃度（濃、中、薄）をうまく操ることがとても大切になります。素人の私にはどれも難しく感じましたが、他の支部図書館の方々も同じ様子でしたので内心ほっとしていました。講師の方々は、そんな私達が座る各テーブルを見て回り丁寧に指導してくれたので、簡易補修の方法をわかりやすく理解できました。

3.3 破れ方によって補修方法を選ぶ

今回は、当局の図書館でも実際に行われる機会があると考えられる、破れたページの補修について、少し説明します。紙の破れ方は、大きく2種類に分けられます。それは、手で引っ張ってできたような、重なり合う部分がある破れと、刃物などによって切断された破れです。どちらも破れたページには変わりませんが、前者は糊だけによる補修、後者は和紙（薄）と糊による補修です。私は、破れ方一つとっても補修のやり方が違うことに驚きました。

3.4 重なり合う部分の破れを糊で補修する

特に印象に残ったのは、手で引っ張ってできたような破れを糊だけで補修する方法です。では、いったいどのように補修するのか。教材の手順には、（破れた）紙の端が重なり合う部分の上下を確認するとありました。ですが、素人の私にはその上下を確認することは少し難しく感じていました。すると、講師は教材の中にあった新聞を破り、どこが断面かをわかりやすく説明してくれました。皆さんも新聞を手で破り、その上下を確認してみるのも面白いと思いますので試してみるのはいかがでしょうか。

次に、今回の補修に必要な糊の濃度（薄）の調整についてお話します。容器を傾けると流れるぐらいの薄さが目安です。まず小筆で糊を少量取り、それを水で薄めて溶いていきます。私は恐る恐る水を足していましたが、講師の方から「もっと入れて大丈夫ですよ。入れすぎてしまった場合、糊を足せば大丈夫です。」と言われ、安心して薄めた糊を作ることができました。失敗しても糊の量を調整することで作り直しができるところは、でんぷん糊の良いところですね。

いよいよ糊の出番となります。私が作った糊を実際に使うことができると思うと、胸がわくわくしました。そんなはやる気持ちだが、糊を使用する前に必ずしなければならない、破れたページの下にクッキングペーパーを敷くことを忘れさせようと思いました。これをしなければ、補修したページの下にも糊が染みこんでしまい、補修どころの話ではなくなってしまいます。実際に補修をする際は皆さんも注意してくださいね。



写真1 手でちぎったように破れたページの補修。重なり合う破れ部分の上側の断面部分に糊をつける

クッキングペーパーを破れたページの上にしっかりと敷きました。そして、糊を塗った箇所を馴染ませるためにヘラの平らな部分を使い軽く押さえながら馴染ませていきます。その力加減を言葉で表すとすれば、「軽く撫でるような」という表現が一番合っているかと思います。水で濡れた紙は非常に破れやすいので、馴染ませる際は強い力では押さえつけないことが大切です。悪戦苦闘しましたが、なんとか糊を塗った補修箇所を馴染ませることができました。

そして最後に、平らな板2枚で資料を挟み、補修箇所をしっかりと貼り付けるために重しを乗せてそのまま乾かして終わりとなりました。

私の初めての図書資料の保存研修は、講師の方々の丁寧なご指導のもとで無事に全ての工程を終えることができました。研修時間内には、補修箇所が完全に乾くことはありませんでしたが、後日、補修箇所の確認をしたところ、とてもきれいに補修できていたことをこの場を借りてご報告します。また、簡易補修研修で行った作業のうち、今回紹介できなかった作業を、一部ではありますが2枚の写真で紹介します。

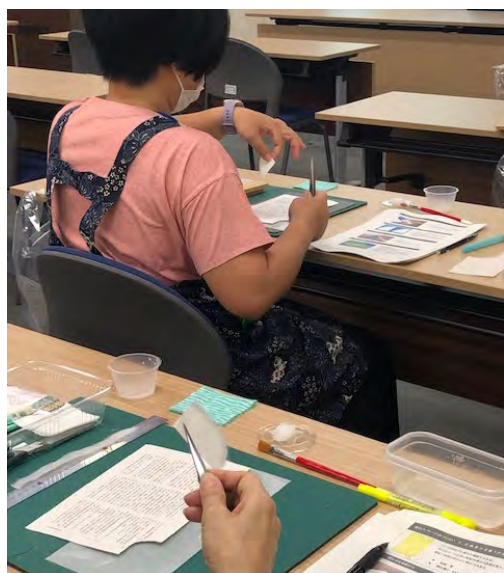


写真2 ページの欠けは、和紙を大きめにちぎり、元のページに貼り合わせる部分の繊維を出してから糊をつける

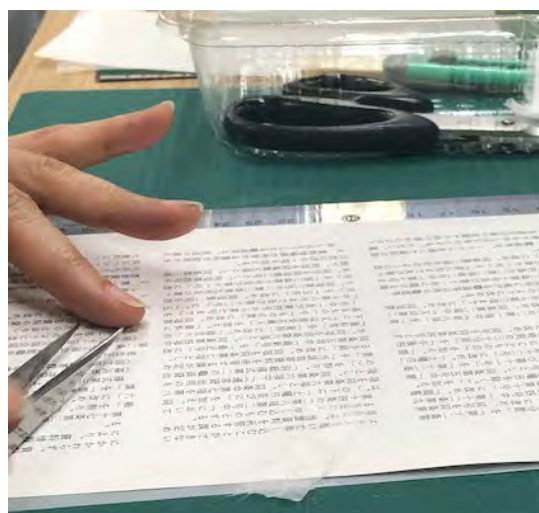


写真3 刃物で切断されたページの補修。補修部分より少し長めにちぎったくいきさ（両側に毛羽（けば）を出し、ページとの馴染みをよくした和紙の帯）に糊をつけて補修する。

4 おわりに

私は、今回の研修でここには書き切れないほど多くのことを学びました。また、他の支部図書館職員の方々と交流するという貴重な機会を得ることができました。今回の経験を生かし、図書館資料の保存を可能な範囲で行っていきたいと思います。

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を徹底し、対面による簡易補修研修を開催していただいた国立国会図書館総務部支部図書館・協力課の方々、貴重な時間を割いて簡易補修研修の講師を務めていただいた国立国会図書館収集書誌部資料保存課の方々に、心より深く感謝申し上げます。

(すみだ ともこ)

国立国会図書館国会レファレンス課及び 国会分館の見学に参加して

支部国土交通省図書館 国土技術政策総合研究所分館 課長補佐 樋口 貴也

1 はじめに

今回この原稿を書くにあたり、まず私の経歴から簡単にご紹介します。採用以来、筑波研究学園都市の研究所で仕事をしております。主に会計や知的財産権管理などを担当してきており、図書館業務を担当するのは現在の部署に着いてからなので経験は1年半しかありません。

それまでは、職場の中に大きめの図書館があるのは知っていましたし、かなり以前は昼休みにパソコン関連の雑誌などを読んでいたこともあります。最近はずっと利用していませんでした。その図書館が国立国会図書館の分館だとは知りませんでしたし、そもそも国立国会図書館がどのようなところなのかも分かっていませんでした。

そのようなわけで、この1年半は知らないことばかりで勉強になることが多く、やりがいを感じている日々です（何歳になっても知的好奇心を満たすことの喜びはなくなりません。）。そして今回は令和4年度特別研修に参加し、国立国会図書館中央館及び国会分館の一部を見学する機会をいただきました。

2 調査及び立法考査局国会レファレンス課

国立国会図書館は国会に属する一機関で、国立国会図書館法にも「国会議員の職務の遂行に資する」という目的が書いてあり、国立国会図書館年報¹にも「衆・参両議院、委員会及び国会議員に対するサービスの提供は、国立国会図書館の第一義的な任務である。」とされていますが、意外にご存じない方もいらっしゃるのではないのでしょうか。かくいう私も当分館で仕事をし始めた頃は、一般来館者である国民へのサービス、または我々のような支部図書館・分館に対するサービスが主なものかと思っておりました。

今回の見学にあたり、まずは中央館の会議室で国会レファレンス課の概要説明を受けました



写真1 国会レファレンス課の概要説明

（写真1）。そこで、国立国会図書館が国会に対して行うサービスを立法調査サービスと図書館サービスに分け、前者を調査及び立法考査局（以下、「調査局」という。）が対応し、後者は国立国会図書館全体で対応していること、その立法調査サービスは更に「依頼調査」と「国政課題に関する調査研究」に分けることができ、国会レファレンス課は、それ

*本稿におけるインターネット情報の最終アクセスは、2022年11月7日である。

¹ 国立国会図書館総務部「国会に対するサービス」『国立国会図書館年報 令和3年度』国立国会図書館、2022年10月、ii. <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12357071>

ら調査等に使用するために特別に収集した資料を配置しているといったことを教えていただきました。

今回はその資料室（写真 2）及び書庫を特別に見せていただきました。資料は国立国会図書館オンラインで検索できる蔵書とは別管理であり、その資料室には、新聞や選挙の記録、地方統計資料など利用頻度が高い資料が配置されていました。さらに、資料室とは別に中央館の書庫内で国会レファレンス課に割り当てられた区画がありました。

また、国の機関などは、納本制度により 5～30 冊と複数冊を中央館に納めているところですが、それらは国際交換に利用するだけでなく、このように立法調査サービスのための資料としても活用されているのだとわかりました。



写真 2 国会レファレンス課の資料室

3 調査及び立法考査局国会分館

国会議事堂 4 階にある国会分館も見学させていただきました。こちらでも直前に会議室にて業務概要の説明を受けております。立地条件を活用し、国会議員、議員秘書、国会職員等に対し、最新の資料や情報を中心に図書館サービスを提供していること、また国会発生情報（議事資料や委員会審議情報等）の収集や、調査局の政策セミナーや刊行物の案内・展示といった調査局のアンテナショップ的役割があるということ、ニーズに特化した小規模図書館であり、すぐ近くで迅速に資料提供やレファレンスが受けられることなども教えていただきました。

実際に国会分館に入ってみると、衆議院と参議院の間の中央棟の 4 階に、コンパクトに資料が配架されており、閲覧室や電子情報コーナーもあり、地方紙・政党紙・業界紙など需要が多そうなものがそろっている印象でした。特に地方紙・業界紙は専門外の分野の見聞を広げるには良さそうで、実際に需要も多いとのことでした。

国会分館は歴史ある建物²にありますので、天井などの意匠も独特ですし、大きなステンドグラスもなかなか見られないものです。このステンドグラスが国会議事堂中央広間の壁面上部に位置していることは説明がありましたが、実際に後から中央広間から見上げて確認することもできました。

5 階に閉架書庫もあるとの説明でしたが、そこは今回見学対象外でした。時間も限られているので致し方ありませんが、またの機会があれば見学させていただきたいと思いました。

分類について、色別シールを活用し、見やすさ分かりやすさに重点を置いている、というの

² 国立国会図書館「本の万華鏡」第 28 回 国会議事堂ができるまで <https://www.ndl.go.jp/kaleido/entry/28/>

は参考になりました（写真3）。図書館に慣れていない者にとっては、色で分類されているということはとても良いと思います。



写真3 色別シールが貼られた国会分館の蔵書

また、国会分館は限られた空間を有効活用するために、明確な基準に基づいて年単位で資料を移動させており、そのような基準を作ることは大事なことだと参考になりました。さらに国会分館の場合は（国会レファレンス課もそうですが）、所管資料を永久保存する必要がないようで、保存スペースを確保する上では大きな利点だと思いました。なお、5階閉架書庫からでも必要があれば5分で資料を用意できるということでした。

4 おわりに

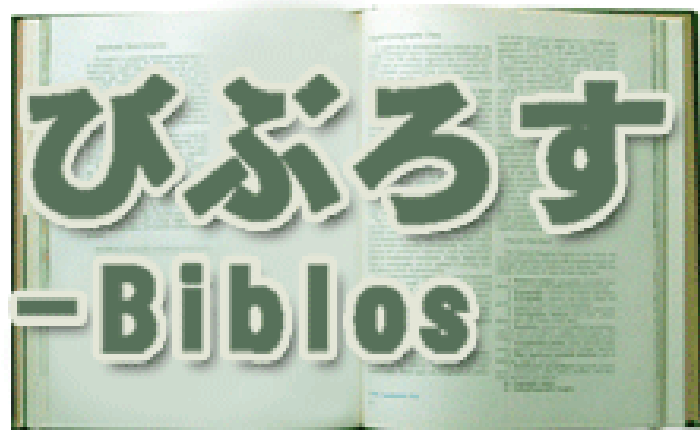
国会レファレンス課、国会分館の見学を通じて、利用者の利便性向上や空間の有効活用についての知見を得ることができました。このような貴重な機会を得ることができたことに感謝いたします。

また、今回は実際の現場に直接触れることの大事さを改めて感じました。コロナ禍においては対面で行うような様々なイベント等の多くが取りやめとなり（今年になって復活しつつありますが）、ネットを活用することが増えてきましたが、やはりどうしても現地・現場に行かないと伝わらないこともあり、それは重要であると思います。

一方、移動時間をかけることなく多くの会議・研修などに参加する機会が増えたのは大きな利点であり、私も多くのオンライン研修を受けることができました。ことCOVID-19には苦しまれた方が多いとは思いますが、全てが悪いことでもなく、社会的制約がリモートワーク環境の整備を加速させ、様々な事がオンラインで行えるようになったという良い面もあります。

上記のような社会情勢の変化にも対応しつつ、今回の研修で学んだことを今後の図書館運営にいかしていきたいと思います。

（ひぐち たかや）



95号

令和4（2022）年12月

発行 / 国立国会図書館総務部

ISSN : 1344-8412

web版ではリンクをご活用いただけます

<https://www.ndl.go.jp/jp/publication/biblos/>

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan